

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第53集

綠山北遺跡

津山市教育委員会

1994

序

緑山北遺跡は中国電力新津山変電所建設事業に伴い発掘調査された遺跡であります。当初は建設予定地内には周知の遺跡は存在しなかったものの、製鉄遺跡として著名な緑山遺跡の北側に隣接している地域であり、関連の遺構が存在する可能性があるため埋蔵文化財確認調査を実施しました。その結果、弥生時代住居址1軒、段状遺構1基、横口付き窓1基が確認されました。このことは周知の遺跡以外にも地中には多くの埋蔵文化財が眠っている可能性があり、事前の確認調査が重要であるということを改めて認識させるものがありました。

今回検出した遺構は確かにわずかではありますが、いずれも我々の祖先が長い歴史の中で残した貴重な文化遺産であります。今後ともこれらを軽視することなく後世に継承すべく文化財保護行政を進めてまいりたいと考えております。

最後になりましたが本調査にあたっては（株）中国電力の多大な御協力を得ることができました。厚く御礼申し上げる次第であります。

平成6年3月31日

津山市教育委員会教育長 藤原修己

— 目 次 —

I 立地と周辺の遺跡	III 調査の記録
1 遺跡の位置と立地.....	1 住居址.....
2 緑山北遺跡と周辺の遺跡.....	2 段状遺構.....
II 調査の経過	3 横口付き窓.....
1 調査の経過.....	IVまとめ.....
2 調査体制.....	15

— 例 言 —

1. 本書は中国電力新津山変電所（仮称）の建設に伴う緑山北遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査にかかる経費はすべて原作者である（株）中国電力の負担によるものである。
1. 確認調査及び発掘調査は津山市教育委員会主任行田裕美と同主事平岡正宏が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔である。また方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書第1図は建設省国土地理院発行2万5千分の1（津山市東部）を複製したものである。
1. 本書の執筆と編集は行田・平岡が担当した。
1. 整理作業から報告書作成に至るまで、野上恭子、岩本えり子、家元博子、中谷幸子の諸氏には多大の協力を得た。
1. 出土遺物及び図面類は津山弥生の里文化財センター（津山市沼600-1）に保管している。

I 立地と周辺の遺跡

1 遺跡の位置と立地（1図）

緑山北遺跡は岡山県津市山綾部字みどり山1643番地他に所在する。遺跡は緑山丘陵の最高所付近の平坦面から北側の斜面に位置し、その海拔は約210mである。付近はやせ尾根と深い谷が複雑な地形を形成しているが、戦後開拓団が入植して丘陵の上部を大規模に畠地化していた。丘陵の東側は吉井川にそそぐ加茂川が流れしており、遺跡の東方で急峻な谷を形成している。

2 緑山北遺跡と周辺の遺跡

緑山北遺跡の南側には草加部工業団地が造成されており、それに伴い多数の遺跡が調査されている。工業団地内の遺跡を中心にして周辺の遺跡の概要を述べていくこととする。

縄文時代に属するものとしては、東藏坊遺跡B地区から楕円押型文や磨り消し縄文の土器とサヌカイト製の石器などがわずかに出土しているに過ぎない（註1）。弥生時代の遺跡は、中期以降の集落遺跡として鰐込遺跡（註2）、稻荷遺跡（註3）、東藏坊遺跡（註4）、上部遺跡（註5）などが知られている。また加茂川の対岸には弥生時代後期の方形墓才ノ峪遺跡（註6）が存在する。古墳時代になると円墳5基で構成される鰐込古墳群（註7）、同じく円墳3基で構成される築瀬古墳群（註8）、単独で存在する木棺直葬のニレノ木南古墳（註9）、横穴式石室



1. 緑山北遺跡 2. 緑山遺跡 3. 築瀬古墳群 4. 鰐込遺跡
5. 東藏坊遺跡A地区 6. 東藏坊遺跡B地区 7. 上部遺跡 8. 稲荷遺跡

第1図 周辺遺跡分布図(S=1:25,000)



第2図 確認調査風景

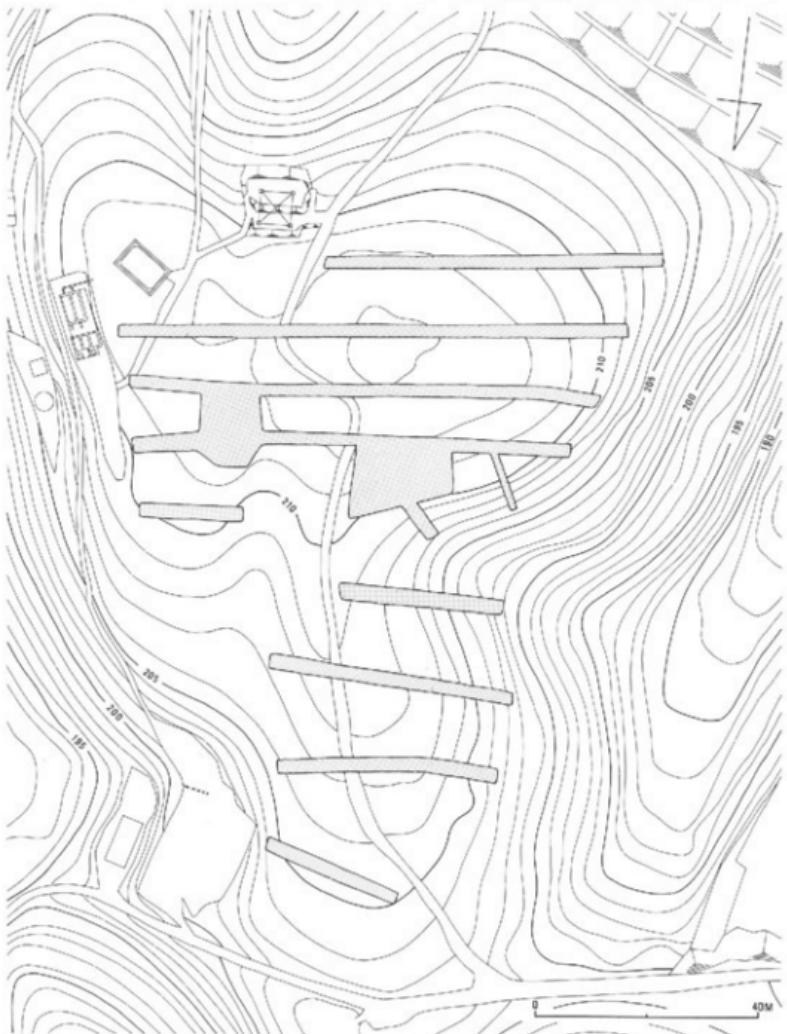
の東藏坊1号墳（註10）、緑山A1号墳（註11）などが存在する。これらはいずれも谷に面して存在する小規模な円墳であり、6世紀から7世紀にかけてのものである。さらに加茂川の対岸には前期の近長丸山古墳群（註12）、全長約45mの前方後円墳を含む近長四ツ塚古墳群（註13）、円墳4基の才の峪古墳群（註14）などが存在する。また本遺跡の南側の尾根上には7世紀前半に位置づけられる製鉄炉と横口付き窯をもつ緑山遺跡（註15）が存在している。

- （註1）安川豈史「東藏坊遺跡B地区」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第9集』津山市教育委員会 1981年
（註2）工業用地造成に伴い1976～78年草加郡工業団地埋蔵文化財発掘調査委員会が調査、報告書未刊
（註3）中山俊紀・保田義治「小原B・稻荷遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第35集』津山市教育委員会 1990年
（註4）（註1）
（註5）安川豈史「上部遺跡発掘調査報告」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第30集』津山市教育委員会 1990年
（註6）中山俊紀「才の峪遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第18集』津山市教育委員会 1985年
（註7）（註2）
（註8）行田裕美「斐瀬古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第13集』津山市教育委員会 1981年
（註9）1976年津山市教育委員会が調査。
（註10）（註1）
（註11）中山俊紀「緑山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集』津山市教育委員会 1986年
（註12）小郷利幸「近長丸山古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第41集』津山市教育委員会 1992年
（註13）「近長四ツ塚古墳」『津山の文化財』津山市教育委員会 1983年
（註14）（註6）
中山俊紀「才の峪古墳群」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第23集』津山市教育委員会 1988年
（註15）（註11）

II 調査の経過

1 調査の経過

平成5年11月1日付で、中国電力株式会社岡山支店取締役支店長岩川泰而から、津山市鞍部地内において新津山変電所（仮称）の建設のため、文化財保護法第57条の2第1項に基づく



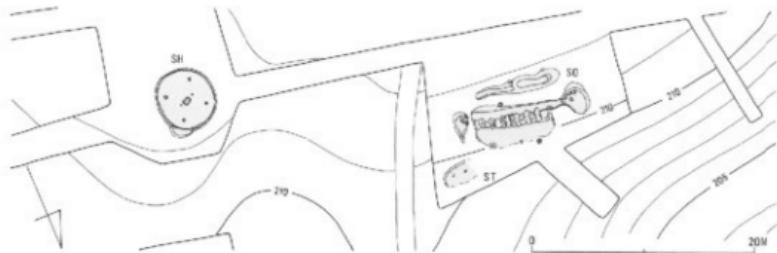
第3図 地形図及びトレンチ配置図(S=1:1,000)

埋蔵文化財発掘届が提出された。工事対象面積は40,519m²である。その後、平成5年12月10日付けで同じく中国電力株式会社岡山支店支店長岩川泰而から埋蔵文化財確認調査依頼が津市教育委員会教育長藤原修己宛に提出された。工事事業計画によると丘陵頂部を削平し、谷部を埋め立てる工法となっており、そのため建設予定地内の切土部分約20,000m²について平成6年1月6・7日の両日バックホーを借り上げて確認調査を実施した。その結果、住居址1・段状遺構1・横口付き窓1を検出した。また検出した遺構部分以外にはトレンチ内では遺物の散布等は認められず、その他の遺構は存在しないと判断した。確認調査面積は約1500m²である。

確認調査の結果、検出した遺構について発掘調査が必要となったため、再び中国電力株式会社岡山支店取締役支店長岩川泰而から津市教育委員会教育長藤原修己宛に埋蔵文化財発掘調査依頼書が提出された。そのため、上記の遺構部分について平成6年1月11日から2月4日まで調査を行った。調査面積は約400m²である。



第4図 住居址検出状況



第5図 造構配置図(S=1:500)

2 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

津山市教育委員会	教 育 長	藤原 修己
	教 育 次 長	内田 康雄
	文 化 課 長	桜山三千穂
	文化財センター所長（嘱託）	須江 尚志
	主幹	神田 久遠
(調査担当)	次長	中山 俊紀
(タ)	主任	行田 裕美
	主事	平岡 正宏

(整理担当) 行田裕美 平岡正宏 野上恭子 岩本えり子 家元博子 中谷幸子

(発掘作業員) 梶岡辰男 梶岡定知 高山香 真木均 多胡公平

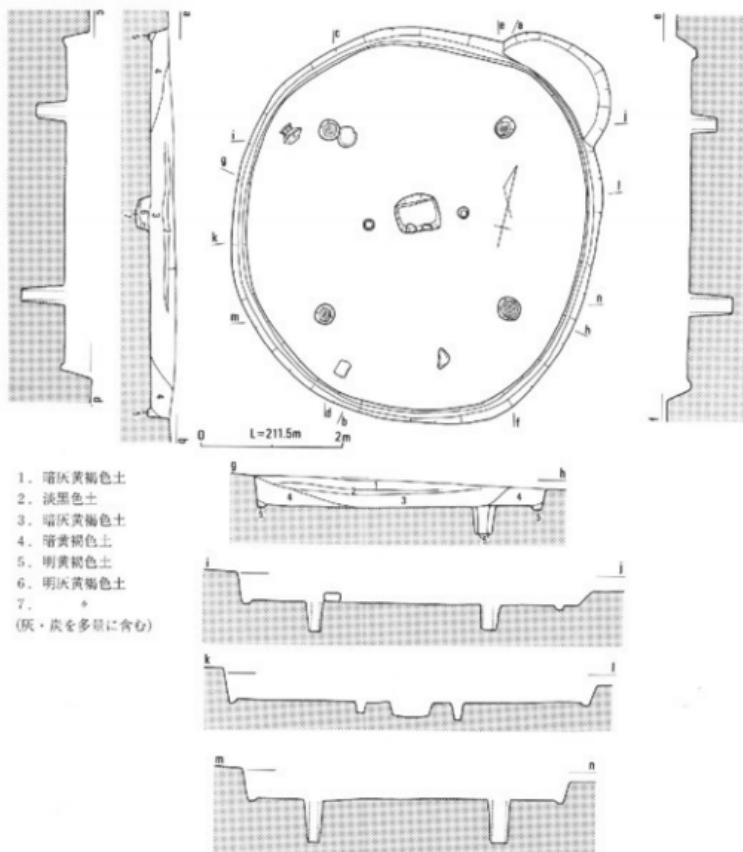


第6図 横口付き窓検出状況

III 調査の記録

1 住居址 (第7~9図)

尾根の頂部の平坦面の東側に位置する。直径約5.6mの円形、4本柱の住居址である。中央穴は60cm×40cmの長方形状を呈しており、深さは29cm程度である。中央穴の長軸方向両側に等間隔の距離をおいて深さ20~25cm程度の小柱穴が存在する。中央穴の底面には炭・灰が多量に存在していた。北東側には幅約2m、奥行約80cmの半円形の張り出し部がつく。この張り出し部の床面は住居址の床面と同一レベルである。壁体溝は住居址を全周するが張り出し部には認められない。この張り出し部の持つ意味であるが、類例にも認められるように(註)正面中央



第7図 住居址 平・断面図 (S=1:80)

に柱穴が位置しており、出入り口とするには不適当であろう。

出土遺物には弥生土器・石器剥片がある。図10・11がそれである。図10の1は壺形土器である。出土位置は7図に示した場所である。口縁部は頭部から「L」字状に外方に張り出し、端面はやや上方に拡張する。内外面ともに剥離が著しく調整は不明である。2は壺形土器の肩部付近の破片である。外面には2条を1単位とする恐らく半截竹管によると思われる斜方向の平行沈線が施され、その下方に4条以上の沈線文が施されている。また内面には斜め方向のハケ目が施されている。3は台付き鉢形土器である。出土位置は第7図に示した場所である。鉢の上半部は精査したが検出できなかった。下半部はゆるやかに内湾しながら立ち上がっている。台の部分には上側に7条、下側に5条の凹線文を施し、その間に不等間隔で7つの長方形透しが穿たれている。この透しは上側の凹線文の一番下の部分を切っていることから、凹線文を施した後に透しが穿たれたことが理解される。また、脚部端面にも3条の沈線が施されている。剥離が著しく内外面の調整は不明である。図11の石器剥片のうち1～6はサスカイト、7は砂岩、8は安山岩である。

(註) 西吉田遺跡住居址7など

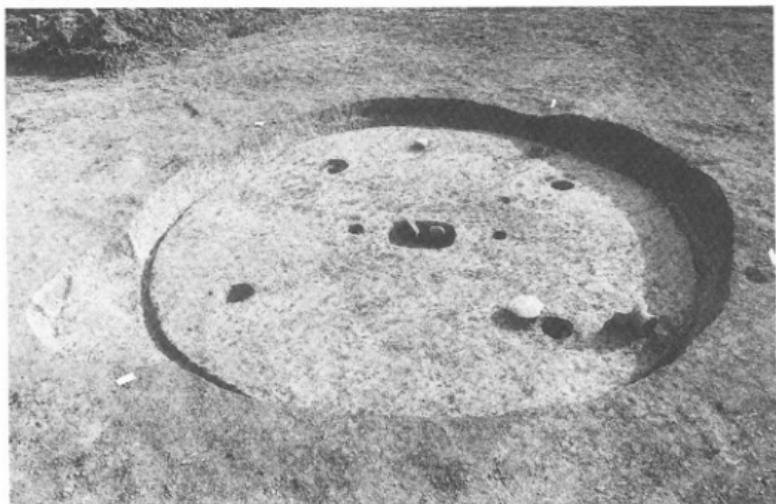
行田裕美 「西吉田遺跡」

『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第17集』

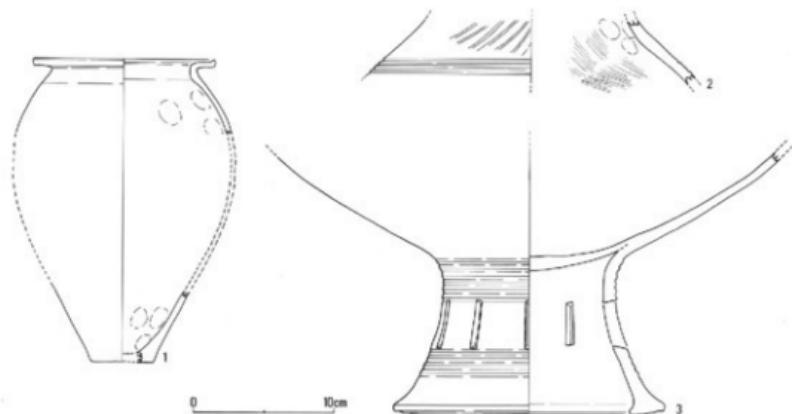
津市教育委員会1985



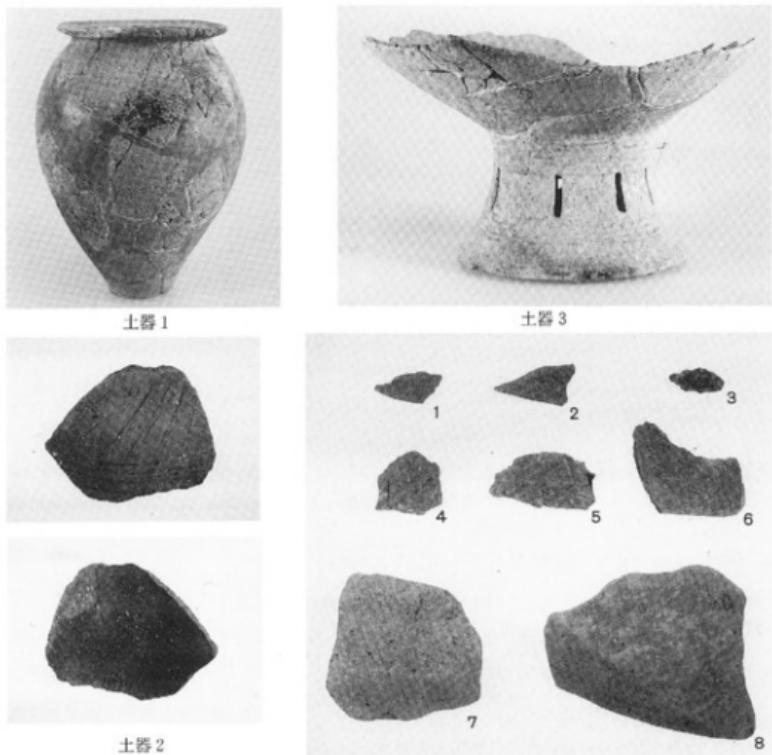
第8図 住居址内土器出土状態



第9図 住居址（北西から）



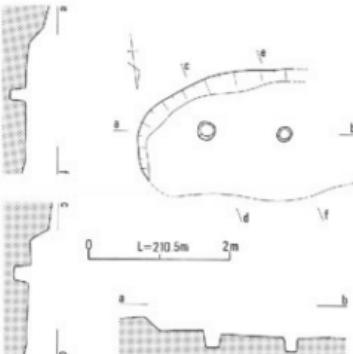
第10図 住居址出土土器(S-1:4)



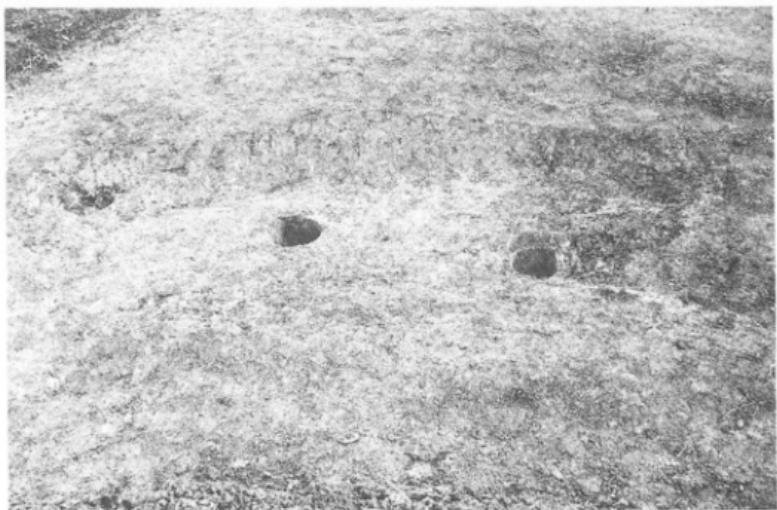
第11図 住居址出土遺物 石器

2 段状遺構（第12・13図）

尾根の頂部の平坦面から北西側へ下る斜面で後述する横口付き窯のすぐ北側の低い場所に位置する。西側は削平されて不明であるが、丘陵斜面をL字状に削り出して長さ3m以上幅1mの平坦面を形成する。平坦面には深さ20cm程度の柱穴が2箇所存在している。埋土は暗褐色土一層である。埋土中から弥生土器細片が出土しているが図示し得るものはない。



第12図 段状遺構 平・断面図(S=1:80)

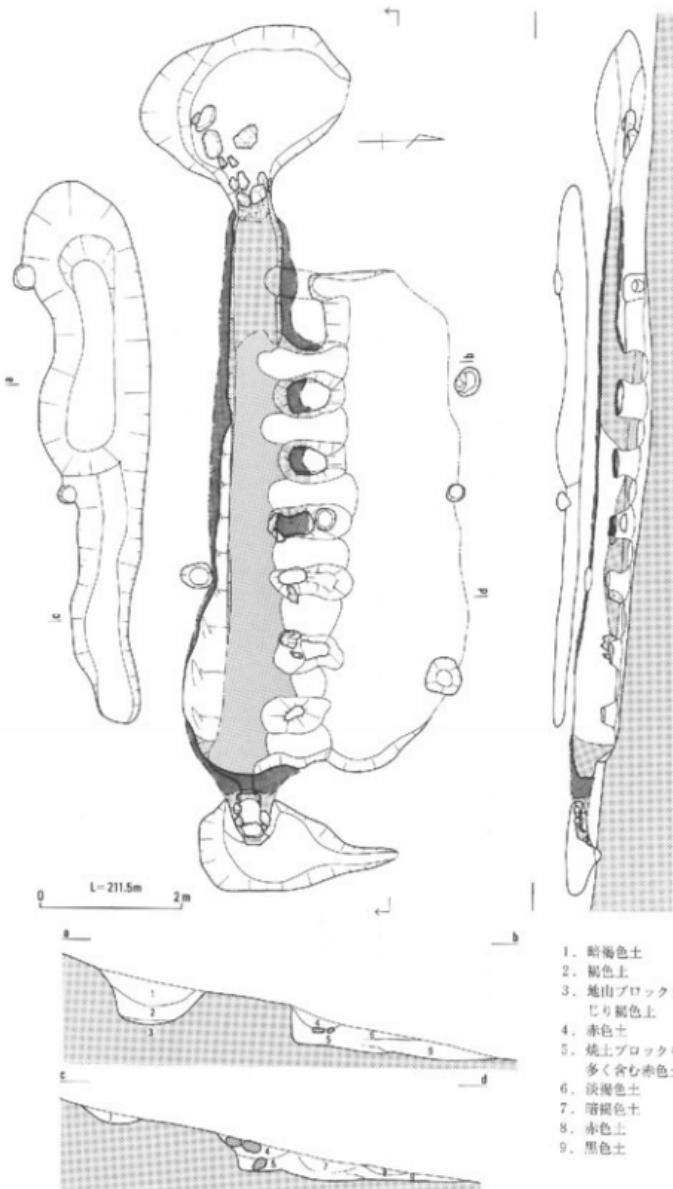


第13図 段状遺構（北から）

3 横口付き窯（第14～21図）

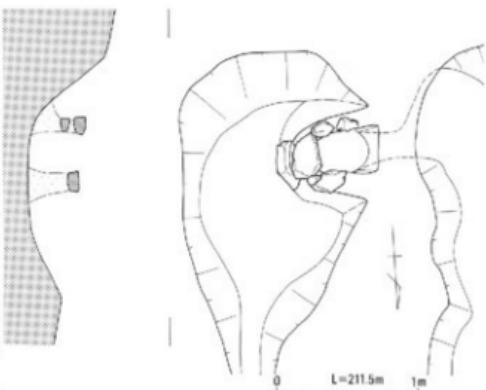
尾根の頂部の平坦面から北西へ向かう斜面に位置する。窯は主軸を等高線に対して平行に向けて立地している。窯は焼成部、山側の溝（上方溝）、谷側の平坦面（側庭作業面）等から構成されており、その遺存状況は比較的良好である。

焼成部は地山を垂直に掘り下げた半地下式構造で焼成部長8.0m、幅80cm、山側の深さ約50cmを測る。谷側の側庭作業面に面して開口している8個の横口のうち、最も焼き口に近い1個以



第14図 横口付き窪平・断面図 ($S=1:80$)

外はほぼ等間隔で並んでおり、その間隔は約40cmである。天井が残っているのは最も焼き口に近い1個のみであり、これは他の横口とは約80cm離れて存在しており、正面形は正円形で直径は約30cmと他の横口よりもかなり小さい。他の横口の正面形は天井が残ってないので正確な値は不明であるが長径50cm、短径30cm程度の楕円形であったと考えられる。焼き口から4つ目と5つ目の横口の間及び6つ目と7つ目の横口の間の焼成部には板石が立ててあり、これは火を受けてボロボロになっている。また焼き口から6つ目の横口には閉塞用かと思われる板石が1点存在していた。横口から焼成部へと



第15図 煙道 平・断面図 ($S=1:40$)



第16図 横口付き窯検出状況（東から）

つながる床面は完掘状態では一段低くくぼんでいるが、このくぼみの焼成部寄りには赤褐色から黒色の良く焼け締まった土が堆積していた。何かを掘り出して低くなつたくぼみを補修したものであろうか。焼成部の埋土中には窯の天井壁片が多く含まれていた。内部から出土遺物は皆無である。

また床面は焚き口から1.8

m程度までは淡黄褐色に、そこから煙道までは青灰色に変化している。また壁面から横口にかけても最大幅20cm程度まで被熱により淡黄褐色から赤褐色に変色している。焼成部の傾斜角度は約3度である。焼成部の西側に焚き口が、東側に煙道が付設されている。

焚き口では窯壁幅が狭くなっている。焚き口の作業面と焼成部の床面のレベルは同一であり、長径約3m、短径約2mの不整円形を呈している。焼成部入口には閉塞用と思われる人頭大からそれよりやや小さめの石を10個程度検出している。

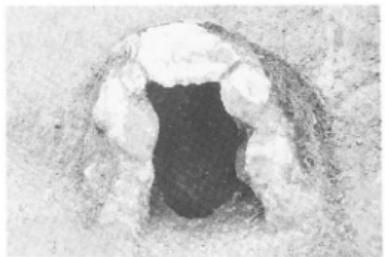
煙道（第18図）は長径約2.6m、短径約1.3mの不整円形の土壙の中に「コ」の字状に石を組



第17図 横口付き窯調査風景



第18図 横口付き窯全景（東から）



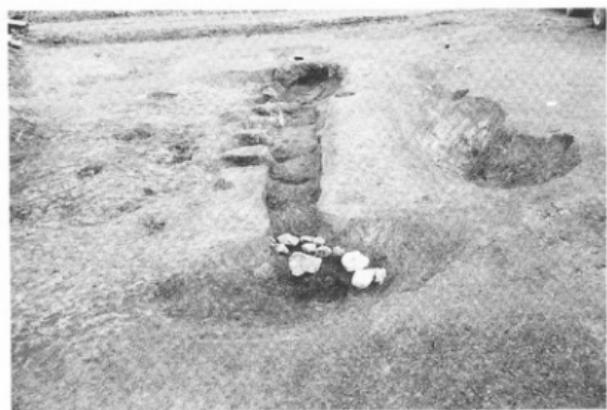
煙道



焚き口



検出状況（西から）



全景（西から）

第19図 横口付き窯



第20図 横口付き窯構口部分

み煙出しの穴を設けたもので、径約20cm程度、長さ30cmの暗渠で焼成部に連結している。この石組みの構造は奥壁には2個の石を立てているが、側壁は下側を土で作り、その上に現状で1ないし2段に奥壁よりもやや小さな石を積んでいる。また煙道内に数個の石が転落しており、本来はもう少し高いものであったようである。

上方溝は焼成部の約1m上方に平行に作られており、長さ約8m、最大幅1.6mを測り、西半分は1段低くなつて、深さは約60cmである。焼き口の作業面にも煙道の土壌にも接続しない。

側庭作業面は焼成部の北側に約7m×1.6mの範囲に形成された平坦面である。平坦面には炭・灰を含む黒色土の堆積が認められた。

この他平坦面の北側に3箇所、上方溝の南側に2箇所、焼成部の南北に1箇所ずつ柱穴状のピットが認められたが、建物の柱穴になるものではない。また出土遺物は皆無であり、窯の操業時期は不明である。



第21図 横口付き窯発掘作業風景

IV まとめ

1 弥生時代の遺構について

弥生時代の遺構は住居址と段状遺構各1であり、時期的には出土土器から中期後半に属するものである。通常の弥生集落遺跡に比べて圧倒的に遺構数が少ないことが指摘される。この数は南接する緑山遺跡B地区（註1）の調査を見ても明らかのように、全面表土剥ぎを実施したとしてもほとんど変わらない数字であると思われる。この事は弥生集落を考えるうえで大変重要な事実である。すなわち、平野部に立地する集落、平野部に面した丘陵上に立地する集落の他に、本遺跡例のようにかなりの高所に立地するケースがあるということである。本遺跡は標高210mを越す位置に立地し、津山盆地平野部との比高差は100mを測る。津山市内では現時点での最高位に位置する遺跡である。

さて、この高所に位置する遺跡であるが、前述のように集落と呼ぶにはおこがましい程、遺構の密度が低いのが特徴のようである。ちなみに緑山遺跡B地区の住居とは直線距離にして約160m離れている。近くに水田等の可耕地もなく、高所という立地条件がもたらした結果かどうかは推測の域をでないが、いずれにしても蓋然とした事実である。ここでは高所に住居1～2軒の遺跡があるという事実関係の把握にとどめておきたい。

2 横口付き窯について

本遺跡の横口付き窯は上方溝、焼き口・燃焼部・煙出しつらなる窯体、作業面より構成されており、基本的には從来の山土例と同じ構造である（註2）。ただ、細かく見れば規模構造等それぞれ異なる。具体的には上方溝の形状規模、横口の数、焼き口・煙出し部の形状等々である。ここではこれらの中で、上方溝・横口の数について若干ふれまとめてとする。

上方溝は全長8mで、焼き口部にも煙出しつ部にも接続せず独自で完結している。溝の底面は西から東にかけて緩やかに傾斜し、中央部あたりから急に深くなり土壇状を呈している。上端からの深さは90cmを測る。土壇部分はどう見ても水がたまる構造としか考えられない。従って、単純に上方溝の機能を排水除湿に限定するのにはもう少し時間を要したい。

次に横口であるが、機能面についてはあえて触れず、次の問題について検討することにする。この窯が注目され始めた当初、8個のものが多かったので通称“八つ日ウナギ”と呼称していたが資料が増加した現在、緑山遺跡4号窯（新）の4個（註3）から藤原3号窯状遺構の12個（註4）と非常にバラエティーにとむことがわかった。当然のことながら、窯体の長さに比例することは言うまでもない。ちなみに横口間の心々距離は平均して短いもので沖田奥3号製炭窯の85cm（註5）、長いもので崩レ塚遺跡窯3の127cm（註6）であるが、ほぼ1m内外の数値を示している。このことから横口の間隔は一定の規律の下に設定されたことが伺える。そしてこのことが横口の機能のヒントを与えてくれるものなのかもしれない。

- (註 1) 中山俊紀「綠山遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第19集』津山市教育委員会
1986年
- (註 2) 行田裕美「製炭窯」『吉備の考古学的研究』山陽新聞社出版局1992年
- (註 3) 註 1 文献
- (註 4) 村上幸雄・谷山雅彦・高田明人・武田恭彰・前角和夫・高橋進一「水島機械金属工業
団地協同組合西団地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告9』総社市教育委員
会1991年
- (註 5) 註 4 文献
- (註 6) 保田義治「崩レ塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第28集』津山市教育委員会・
津山市土地開発公社1989年



緑山北遺跡

津市埋蔵文化財発掘調査報告第53集

平成6年3月31日発行

発行 津市教育委員会

岡山県津市山北520

印刷 津山朝日新聞社

岡山県津市山町13